

第 51 回 IRIDeS 金曜フォーラム

日 時：平成 30 年 1 月 26 日（金）16 時 30 分～18 時 30 分

会 場：東北大学災害科学国際研究所 1 階 多目的ホール(仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1)

テーマ：「災害が起きたときに、現場で求められているものは何か」

概要：東北大学災害科学国際研究所では、「実践的防災学」の創成をミッションにしています。本フォーラムでは、当研究所の研究者たちが、これまでの現場での研究や実践を通してきて見えてきた知見を紹介し、議論します。皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。

1. 16:30～16:55（発表 25 分）

タイトル：GB-SAR による地滑りモニタリング技術－荒砥沢、南阿蘇での実践から－

話題提供者：佐藤 源之（災害リスク研究部門 広域被害把握研究分野 ※東北アジア研究センター）

発表要旨：我々は電波を利用した地表設置型合成開口レーダ(GB-SAR)を用いて地滑り地帯を遠隔的にモニタリングする技術の開発を行ってきました。2008 年岩手・宮城内陸地震によって発生した宮城県栗原市の荒砥沢大崩落地域では栗原市と連携し 2011 年以来連続したモニタリングと、地域住民への早期警戒情報の提供体制を確立しています。また 2016 年熊本地震については東北大学、熊本大学、情報通信研究機構(NICT)が協力して、南阿蘇村立野地区の大規模地滑り地帯を GB-SAR により斜面安定化、道路復旧工事に伴う二次災害の予知に利用するためのモニタリングを実施してきました。本報告では GB-SAR 計測の概要とそれによって期待できる成果をまとめます。

2. 16:55～17:20（発表 25 分）

タイトル：豪雨災害から命を守るために必要な考え方

話題提供者：森口 周二（地域・都市再生研究部門 地域安全工学研究分野）

発表要旨：我が国においては、豪雨災害に対して高度に対策が推進されており、世界的に見て最高水準の社会システムが整備されています。しかしながら、それでもなお毎年のように豪雨災害による被害が発生しており、現状の被害の抑制のためには、個人の防災能力を引き上げることが最重要課題と考えます。今回の話題提供では、近年の豪雨災害の調査や被害分析の結果に基づいて、命を守るために個人に要求される考え方を整理してみたいと思います。

3. 17:20～17:45（発表 25 分）

タイトル：公衆衛生学と人工知能解析技術を用いた災害対応

話題提供者：栗山 進一（災害医学研究部門 災害公衆衛生学分野）

発表要旨：公衆衛生学では痛くもかゆくもない方々に対して、病気予防の必要性に気付いてもらい、さらに病気になった際に健康被害が最も少なくなるよう予防的な行動変容を実現していきます。例えば「塩」などという極めて「おいしい」ものの摂取を集団で減らすことに成功し、循環器疾患を減らしていきました。この考え方と手法は防災・減災においても同様に用いることができます。今回は、①被災診断、②減災啓発、③急性期のライフジャケット等の活用、④人工知能も用いた救助・避難・救護計画、⑤亜急性期におけるひと・ものの適正配送、⑥衛生管理、⑦復興期における慢性疾患対策、⑧メンタルヘルス対策といった課題について、発災前から発災後のあらゆる時間軸で災害にどう立ち向かうか、最新の災害公衆衛生学の進捗をご報告いたします。

4. 17:45～18:10 (発表 25 分)

タイトル : より効果的な復興のために ～必要な備えと実行体制～

話題提供者 : 平野 勝也 (情報・社会連携部門 災害復興実践学分野)

発表要旨 : 東日本大震災の津波被害からの復興事業は、人口減少下における初めての大きな災害でした。このことから、様々な混乱の中で、本来ならできたであろうことができなかつたり、いたずらに時間を費やしてしまったりということが多く見受けられました。復興事業をより効果的に実施するために必要と思われる地域の備えと国が持つべき備えや復興の実行体制について、石巻市、女川町などで復興事業に深く関わり続けている経験から、課題整理と提言を行います。

5. 18:10～18:30 質疑／総合討論 (20 分)

司会・進行 : マス エリック (災害リスク研究部門 広域被害把握研究分野)

佐藤 翔輔 (情報管理・社会連携部門 災害アーカイブ研究分野)